

富士と北斎

昔、富士山の見える東海道の道を、てくてくと歩いていく旅人がいました。この人は、北斎という絵かきでした。

北斎は、江戸を出発してから、遠くの山や森の向こうに、ちらちらと富士山が見えだすと、思わず足を止めました。そして、うっとりとながめ、つぶやきました。

「ここで見る富士山は、さっき見たのとは少しちがっている。」

江戸をたつてから2, 3日……。なんと様々に見えるのでしょうか。富士山のすがたは同じでも、やさしく見えるときや、にっこりほほえんでいるとき、つんとすましているようなときもあります。朝の富士山、夕暮れの富士山……。北斎は、胸をわくわくさせました。道ばたに立って、夢中になって富士山を写しとりました。

半年ほど旅を続けて、北斎は江戸へ帰ってきました。北斎は浮世絵をかく人でした。浮世絵というのは、昔の版画です。北斎のかいた絵は大変な人気でした。人々は長い旅をした北斎が、どんな絵をかくのか待ちました。しかし、1つもかこうとはしません。

4, 5年たつと、北斎はふたたび江戸から出ていきました。そして、前と同じように東海道を旅していきました。箱根の山をこえると、北斎の目はかがやきました。すみわたった空に、くっきりと秋の富士山がそびえ立っていました。北斎の帳面は、富士山でいっぱいになりました。かききれないことはしっかりとむねの中にたたきこみました。そして、北斎は（ああ、この山をどんなふうにかき表したらよいだろう……）と、考え続けました。

1年あまり旅を続け、北斎は江戸に帰ってきました。江戸の人々は、北斎の絵を待ちましたが、北斎はかきませんでした。そして、5, 6年の月日がたちました。

ところがある日、何を思ったのか、北斎はにこにこしながら、仕事部屋へ入っていきました。そして、半月ばかり絵筆を紙に走らせていました。

「さあ、できたよ。やっとできたよ。」

そう言って、仕事部屋から出てきました。北斎は、富士山をかいたのです。すばらしい富士山の絵でした。北斎が最初に富士山を見たときから、20年近くもたっていました。その間、北斎は、富士山と自分がぴったりと1つになるのを、ずっと待ち続けていたのです。

それから後も、北斎は様々な富士山をかきました。1年に4、5まいずつ、10年ほどかき続けました。どれもこれも、あっとおどろくおもしろい、美しい富士山ばかりでした。遠くからや、近くから見た富士山、夜明けの真っ赤な富士山、大波がわき立っている間から、遠くにながめた富士山もありました。北斎の絵は46まいにもなりました。

北斎ほど、様々な富士山をかいた人は他にありません。「わたしは、100までも、120までも生きるんだ。わたしが、どんな富士山が好きか、みんなに見せてやるぞ。」北斎はかき続けました。

こうして北斎は、「富士山の北斎」となりました。そして、北斎の浮世絵は、日本ばかりでなく海外でも知られるようになりました。

文化のちがいや時代をこえて、今でも北斎の作品は、世界中で愛されています。